

航跡はるかなり

―回想、我が兵歴―

石川県 柏木幸雄

私は、昭和三（一九二八）年九月、石川県鳳至郡門前町（輪島市）で、祖母、両親の一人息子として生まれる。

父は、下関を基地とする東シナ海でのトロール船に乗っており、海軍に徴用され、太平洋に散開する監視艇としての任務に就いていたようです。その監視艇の乗組員はせいぜい三十人くらいで、半分は海軍軍人ではないかと思えます。

この辺は船乗りの多い土地で、私も門前町の黒島国民学校高等科を卒業すると、富山の商船学校に入ろうと思い、父の許可をもらい願書を出したのですが、学校の先生が、どうせそういうことなら海軍に入れということで海軍を志願したのです。当時はそういう世相でしたから、先生が父に手紙

を出し、父も、そういうことならと、一人息子でありましたが許してくれ、先生も学校で「柏木は偉い」と皆に話されたようでした。

そのころ、海軍の事情も多少知っていましたので、早く入ったほうがラクだろうから、早目に入っておこうということで、昭和十八年七月に舞鶴海兵団に入団となりました。「海軍練習兵」通称「特年兵」といわれた第二期です。

〔「特年兵」とは特別年少兵の略で、海軍の人的軍備の強化のため、十六歳以上の志願兵よりさらに若年の少年を対象として募集された。「海軍練習兵」は海軍部内の正式呼称であった。〕

第一期の採用は昭和十七年九月、入団後約一年半教育・訓練を行い、引き続き兵種に応じた各術科学校の普通科練習生となった。昭和二十年五月の第四期生まで総計一万七千二百人の特年兵が採用され、一期生は約二千人、二期生は約千二百人の戦死者を出した）

当時の海兵団団長は、ルンガ沖海戦を指揮した

名将田中頼三少将でした。かつては「えっ、十六歳、昭和三年生まれの兵隊が来ているのか」と、他分隊の古参下士官に吃驚されたものです。

特年兵の初年兵教育は、中学三、四年の学力をつけさせる趣旨があり、一般学科も、英語は敵性英語は廃止というシャバに対して、海軍の塙の中では英語を勉強していました。

戦局は急迫していた当時のこと、一年間の課程を十カ月半で叩き込まれ、翌年の昭和十九年五月に海軍航海学校の第十八期普通科運用術操舵練習生として入校しました。繋留練習艦「春日」での基本実習の後、練習艦「楡（初代）」及び「葦（初代）」による東京湾内での航海練習がありました。これらは中型の駆逐艦で、我々は世間を知らないものですから、訓練は厳しいものですが、こんなものかというところもありました。

この間、「春日」では初めて様式トイレを体験し、また当時の東京湾は行き交う船舶、艦船もほとんどなく、戦時とは言え不気味な感じがしたも

のです。現在の船舶交通の過密さとは比較する意味ありませんが、戦争開始時と、その後の米軍機の大空襲を思うとき、まさに嵐の前の静かな一時期であったように思います。

昭和十九年九月、海軍航海学校の課程を終了し、ほとんどの同期生が実施部隊に配属となる中で、私は舞鶴海兵団第五分隊（補充分隊）に配属となり、待機することになりました。

配属になるとすぐ分隊事務所に呼び出され「海軍兵学校に予科制度が発足するが、第二期特年兵は、受験資格があり、受験のために選抜試験を受けよ」との思いもかけない指示を受けました。

このご指示に心は躍ったのですが、戦争にきたのにまた勉強かと思った記憶もあります。この選抜試験にはどうにか合格し、それから約三カ月、毎日の温習時間に特年兵の講堂に通い、兵学校受験のための特訓を受けることとなったのです。

（海軍兵学校予科制度は、兵学校の生徒の採用年齢を一歳下げ、最初の一年を準備教育に当てる

という制度で、昭和二十年四月に実施された)

ところが、受験間際の同年末になって、海軍省の通達により、部内からの予科受験は取りやめとなり、いつときはヒヨットすると、と本気になっていた熱い思いは一片の夢となったのです。予科制度が実施されたのが昭和二十年四月ですから、当時の内外の戦況と情勢を思えば当然だったのではないかと思えます。

しかし、これがその後の私の運命を決めることとなったのではないかと思えます。このあとすぐに改T型駆逐艦「椎」の機装員を命ぜられました。そのころは既に艦隊の出番はなくなっていた時期でした。

改T型駆逐艦は、太平洋戦争末期に、ソロモン海域における海戦の結果、日本海軍の艦艇は、予想を超える消耗戦の結果、駆逐艦も大打撃を受け、この喪失した駆逐艦を補うために計画されたもので、T型駆逐艦をより多く急造するに適するよう簡素化したものであったといわれています。

この改T型は十四隻建造され、「椎」は六番目の駆逐艦でした。そうして「椎」は昭和二十年三月舞鶴工廠で、進水後約六カ月で完成、帝国海軍最後の実戦部隊である第三十一戦隊第四十三駆逐隊に編入されました。

また改T型は、これまでの戦訓を徹底的に取り入れ、対空、対潜の両面に対応する最新の兵器を搭載し、また被害に対しても強靱、実戦的にも極めて優れた駆逐艦であったといわれている。

特攻兵器であった「回天」一基を艦尾に搭載し、本土決戦に備えつつ、グラマンの攻撃を受けながらも、発射訓練を回天基地であった平生沖で行っていました。この間、同じ部隊の僚艦「梨」は柳井沖でグラマンの集中攻撃を受け、その吹き上げる黒煙を、隣の島影で身を潜めながらむなしく眺めていたのが思い出されます。

(この「梨」は、昭和三十年ごろ、引き上げられ、自衛艦「わかば」となりました)

その後「椎」は僚艦「萩」と共に呉に回航され、

終戦まで、呉の海上防空砲台として呉港に在泊しました。六月の呉工廠が大爆撃を受けた当時は、被雷箇所修理のため機関解放をし、棧橋に繋留中でしたので、B29の巨大な爆弾が降る中で身動きもできず、至近弾による海水を浴びながら艦橋で配置に就いていたのを思い出します。

八月六日の広島に対する原爆の投下当時は、私は朝の課業始めと同時に工廠に修理品を持って行った時で、あの閃光と大爆風を、その工廠の修理部で体験しました。その直後は、もちろん、原爆などとは知らず、広島付近の弾薬庫の爆発かと、話し合っていたものです。

終戦を知ったのは、呉に集結していた日本海軍の残存艦艇が、いっせいに艦尾で最後の軍艦旗降下を行い、総員敬礼のうちに奉焼したことです。各艦から響く喇叭の音は一際もの悲しく、帝国海軍の終焉を弔ったものだったのでしょう。それに立ち会った感慨を思い、それは今も忘れることのできない心に響く情景でした。

我々には復員はありませんでした。航海科であった私たちは賠償艦艇の運航要員として残され、海軍二等兵曹に任ぜられ、「解員により後備に編入し、充員召集を命ぜらる」とのことで、第二復員官補として復員輸送業務に就きました。まだ、年齢満十七歳の時でした。

かくして私は、再び駆逐艦「椎」に乗艦、昭和二十年十月より同二十一年十二月まで復員、引揚者の輸送任務に当たり、マニラ、タフコパン、釜山、コロ島、上海、沖繩、塘沽、父島など約五十回以上に及ぶ航海をしました。

駆逐艦「椎」は昭和二十一年十二月、特別保管艦となり、翌年七月、ソ連に引き渡されました。

昭和十八年入団の私の戦歴は以上の程度で、戦歴というものでもありませんが、あの大戦に参加した一少年の記録として、多少の意味もあると思います、はるか水平線のかたに消えかかっている私の航跡をたどったものです。

しかし、私の航跡は、戦後にも引き継がれまし

た。旧海軍航海科の技術を生かし海上に職を求め
る決心をし、その後、約六年間は千トン級の近海
航路の普通船員として勤務、昭和二十九年四月よ
り四年間に当時の運輸省所管の船舶職員再教育機
関「海技専門学校（海技大学校）」に入学、船舶
職員としての教育を受け、甲種船長免許（一級海
技士）の免許を受けました。

昭和三十三年より昭和六十一年の退職まで、多
くの船舶の航海士や船長を務めました。

特に昭和五十五年ごろまでの約八年間、十万吨
ン型タンカー「雄琴丸」の船長として勤務いたし、
私の約六十年に及ぶ長い長い航跡を終えましたが、
海上職を退職後は地域の福祉関係のお手伝いをさ
せて頂いて来ました。

最後に、兵歴は二年二カ月の短いものですが、
少年期の一時期を国の危機に捧げ得たことに悔い
はありません。ただ幼くして散華した多くの同期
生を思い、ご冥福を祈るばかりです。

航空母艦が魚雷で沈没

一晚中海を泳ぐ

福島県 鈴木末吉

私は昭和二（一九二七）年三月、福島県喜多方
町の農家の四男に生まれました。両親と兄が三人、
姉二人、妹二人の八人兄弟で、十人家族でした。
現在なら大家族と言われますが当時はどこの家庭
も同様に大勢おりました。

高等小学校を卒業してさらに農家を手伝いなが
ら町の学校へ一年通いました。日本の海軍と空軍
がハワイの真珠湾を奇襲攻撃して太平洋戦争が勃
発した昭和十六年には、私はまだ十四歳のときで
した。ラジオ放送は毎日「日本軍の連戦連勝」の
大本営発表のニュースで湧き立っておりまして。
そして昭和十八年、アメリカ軍の反撃によってだ
んだん戦況雲行きが怪しくなってきたのも知らず
に、私は十六歳で横須賀海兵団に入団を志願しま